Title	第 1 回組織神学研究会 「日本のキリスト教と『選択』報告（2015 年度聖学院大学総合研究所 組織神学研究会 主催）
Author(s)	柳田，洋夫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :44-44
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5414
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015年度 聖学院大学総合研究所 組織神学研究会 主催
第1回組織神学研究会
「日本のキリスト教と『選択』」報告

発題者：清水正之先生（上段左）

2015年5月26日（火）、聖学院新館集会室にて、2015年度第1回組織神学研究会が開催され、清水正之聖学院大学学長・教授によって、「日本のキリスト教と『選択』」というテーマで発題がなされた。

まず、非キリスト教的（非宗教的）社会におけるキリスト教のありかたをも含め、諸価値が対立し多様な価値観が混在する共同性における統合的な原理とは何かという問題意識とともに、現今の日本におけるキリスト教の低調さは、明治以来の思想・宗教における「選択」意識の重要性へのまなざしが希薄化してきたゆえではないかという洞察が示された。以下、示唆に富む発題の内容の一端を記す。

「世教」と「世外教」の区別を立て、神道を宗教の埒外においた西村茂樹の『国民道徳論』は、公教育をはじめとして広く近代の支配的世界観につながっていったが、そのような西村の構想はそれなりの意識的な「選択」でもあった。このような近代化の過程の精神的状況に関しては、山路愛山のような「世外教」的視点を持ちえた立場についての考察も必要である。

次に、人々の個人的な宗派選択が比較的自由であったキリシタン時代において、諸宗派の教義に通じながら、それらをさめた目で眺め、相対主義的な態度をとっている教養人たちがキリスト教に関心を寄せ、帰依していたことが注目される。ここで、このような、「場」ないし多様な価値観の混在する＜限定された相対主義＞と、それを超えて、「信」を獲得しようとする思想的選択の可能性が問われなければならない。そして、このことに関連して、①歴史意識とその簒奪からの回復（植村正久・山路愛山）、②共同性の再考（北村透谷・森有正・井上洋治）、③情意の位置づけ（土居健郎）、④神観の検討（北森嘉蔵・和辻哲郎）、⑤新たな統合と一致（ブルンナー）という諸課題が挙げられる。

以上の論点のいくつかは、共同性（関係性）という問題に連関しているが、この社会の「磁場」における共同性が再考されなければならない。そのためには、間柄主義をとる和辻的共同体論も無下に斥けることはできない。また、限定的相対主義あるいは場の相対主義を超えて、価値対立に対するメタ的（超越的）視点を練り上げることにも意味があるだろう。このような意味において、日本キリスト教思想史研究、日本の神学のさらなる進展を望んでいる。

以上、不十分ではあるが報告とする。活発な質疑応答もなされ、有意義な会となった。今後さらに機会が与えられるならば、日本における思想の「選択」にかかわる＜主体＞の問題（「古層」を想定しないにせよ）、さらには、「秘奥なる人格」相互の関係性もしくは共同性構築の可能性と問題などについてさらにご教示いただきたいと願うものである。

（文責：柳田洋夫［やなぎだ・ひろお］聖学院大学人文学部日本文化学科准教授／人文学部チャプレン）